

6 冠攣縮により2枝同時閉塞を呈したと思われる若年者心筋梗塞の1例

永井 秀哉・土田 圭一*・小田 弘隆*
三井田 努*・高橋 和義*・尾崎 和幸*
岡村 和気*・小幡 裕明*・萩谷 健一*
新潟市民病院救命救急センター
同 循環器科*

症例は28歳、男性。運動後の休憩中に突然胸痛を自覚し、発症約40分後にショック状態で当院へ搬送された。来院時の心電図で異常Q波をV1-4に、ST低下をV3、4に認め、来院20分後にST上昇をII、III、aVFに認めた。緊急冠動脈造影検査を行い、血栓像を伴う99%狭窄を#1に、完全閉塞を#6に認めた。大動脈内バルーンポンピング作動下に冠動脈内血栓溶解療法を左前下行枝と右冠動脈に行い、各病変は狭窄率25%以下で再灌流に成功した。max CPK 10900 IU/lで、退院前の心臓カテーテル法で左室拡大とびまん性壁運動低下を認めた(左室駆出率20%)。アセチルコリン冠攣縮誘発試験で左冠動脈投与により#6と#12に冠攣縮が誘発された。血管内超音波法による観察では#6と#1に軽度のプラークを認めたが、プラーク破裂所見は認められなかった。本症例は喫煙と家族歴の冠危険因子があり、若年者心筋梗塞の発症機序に冠攣縮が関与すると考えた。

7 甲状腺ホルモン不応症の経過中に下垂体腫瘍が出現した1例

松林 泰弘・森川 洋・山田 貴穂
篠崎 洋・小原 伸雅・岩永みどり
羽入 修・平山 哲・相澤 義房
新潟大学医歯学総合病院第一内科

症例は72歳、男性。1985年頃、近医の検査でT3 2.1ng/ml, T4 > 20 μ g/dlよりBasedow病と診断された。メルカゾールの内服が開始されたが効果なく、1986年6月にはIsotope therapyが施行された。しかしその後もFT3, FT4, TSHの高値が持続していた。TSH不適切分泌症候群(SITSH)と考えられ、精査の結果、甲状腺ホルモ

ン不応症(RTH)と診断された。しかし、その後もメルカゾール投与は継続されていた。1994年には頭部MRIでmicroadenomaが認められた。また、2008年入院時にはTSH α -subunit, α -subunit/TSHモル比の上昇が新たに認められた。RTHにメルカゾールの長期投与をしたことが、TSH産生細胞の過形成を促し、さらにTSHomaが発生したと仮説を立てた。今回メルカゾールを中止したところ、FT3, FT4, TSH, 甲状腺腫大の著明な改善を認め、現在に至っている。SITSHの鑑別、治療法、今回の反省点も含め文献的考察も含め報告する。

8 当院における喀血に対するカテーテルインターベンションの検討

渡辺 健雄・斉藤 泰晴・桑原 克弘
大平 徹郎・楚山 真樹*・安住利恵子*
木村 元政**
国立病院機構西新潟中央病院呼吸器科
同 放射線科*
新潟大学医学部保健学科**

【目的】喀血症例に対する気管支動脈塞栓術および体循環系動脈塞栓術の効果・合併症について臨床的に検討した。

【対象と方法】1996年1月から2007年8月までに喀血を呈し金属コイルとゼラチンスポンジを塞栓物質として動脈塞栓術を施行した47症例(男性30例、女性17例、年齢45~82歳、平均63.7歳)を対象に、基礎疾患、治療効果、合併症の種類と頻度を検討した。

【結果】初回塞栓術の短期効果(1ヶ月未満)としては47症例中、42/47(89.4%)で止血が得られた。初回塞栓術が成功した42例の中・長期効果(1ヶ月以上)としては観察期間1~74ヶ月(平均24.4ヶ月)において13例が再発した。このうち、止血困難な2例に肺切除が行われ、2例が喀血にて死亡した。合併症は軽微なものが大半であったが、カテーテル操作に関連した脳梗塞を1例に認めた。

【考察】喀血に対する動脈塞栓術は即時的止血